

2. 荒起こし

苗代にも、本田の田起こしにも、秋の麦の畝立にも、かなりのドタでも、とにかく牛をよく使った。田起こしには手順がきちんと決まっていた伝統を感じさせる。

◆アラオコシ～タニアセ

ヒラタ、つまり一毛作田の稲刈り跡を耕して田植えの準備をする作業手順は――

4株を1筋にして(1ブロックと考えて)、①アラオコシは、まず内側の2株を中へ往復ですく、次に外側の2株を中へ往復ですく。②このままでは畝の下にすいてないところが残っているので、2往復で畝の下をすくのマルメという。

③クレガエシはいわばアラオコシのやり直しで土をコマコ(細かく)するため。④この状態で4株1畝に盛られているので、両側の畝の肩を谷間へ動かして2株畝の形にするのがタニアセ。この方が平坦になってウマグワ(馬鍬)が掻きやすい(千里丘東)。

◆ドタはベタスキ

次にドタ(湿田)はベタスキで、回りながら一方へ起していただく(千里丘東)。

◆長床・短床は使い分け

農業史の本には長床犁は江戸時代にすたれたと書かれているが、摂津市域では長床犁は残りがよく、短床犁2点に対し長床犁は4点が寄贈されている。

長床犁の長所を聞くと、まっすぐ綺麗にすける、株に当たっても短床犁のように床が逃げない、麦の畝立ては綺麗にできる、ドタ(湿田)で使うには長床犁、などである。

人に見られるところは長床犁で綺麗に仕上げた。稲刈りあとの麦の畝立ては長床犁。短床犁だと畝の土が落ちてくる。麦の畝崩し～田拵えは短床犁、牛も軽い(千里丘東)。土のきついところ(粘土質)は長床犁。短床犁ではサキが逃がしてしまうと土が起きない。土のやさしいところは短床犁がいい。長床犁は運ぶのはえらいが作業にはいけば楽。短床犁はイノキ(動き)たおしよる(別府)。

◆サキとヘラは鋤物

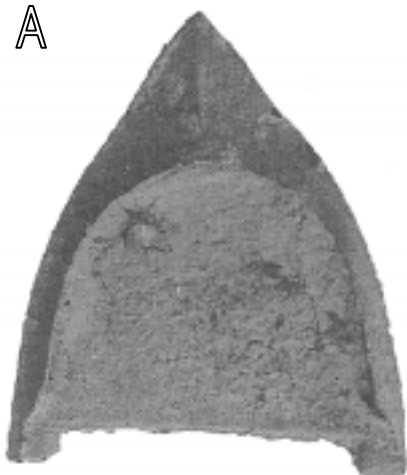
〈A〉のサキは長さ26cm、〈B〉のヘラは44cmでどちらも鋤物。ヘラは裏から止める。サキは時々折れるし固い土なら2反もすくと切れ味が落ちるので毎年2～3枚は使った。籠に入れたサキをオウコ(天秤棒)でイノテ(担いで)売りにきたという(庄屋)。

サキの古手をコンロにかけて「1銭洋食」を焼いた。薄いお好み焼きだ(千里丘東)。

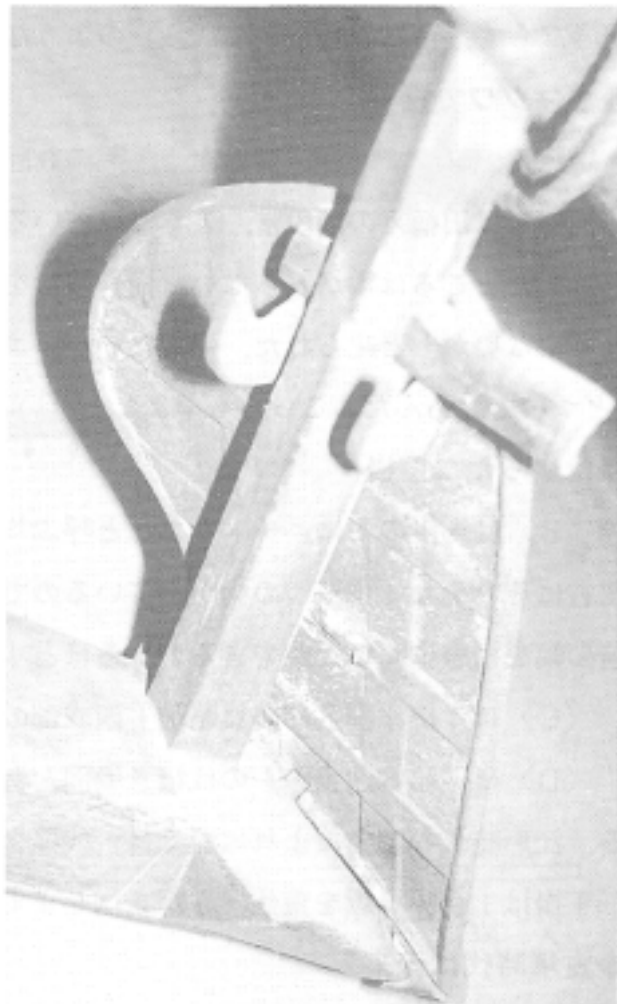
◆カラスキと牽引具の部分呼称

牛が姿を消して四半世紀、薄れる記憶の中から聞き出せた呼称を〈D〉にまとめた。

A



C



B



D

